

## 今岡先生の見はてぬ夢

鈴木 範久

屋久島の千年杉を仰いだ人は、長年月の風雪にたえ、生き残ってきた偉大な生命力にふれて、自分の生命の鼓舞される思いがするという。

今岡先生にお会いしたときは、きまって同じ思いがした。病気をしたり、精神的に弱っている最中にお会いしたときは、なおさらである。「まだ先生のお年の半分にも達していないではないか。へこたれるな」と、みずからに言い聞かせ、はげまして帰ることがおこった。

今年になり、やっと先生の半分に達したと思ったのもつかの間、先生の御他界を新聞で知って驚いた。新聞記事では、まず密葬となっていたので、それに出かけることは遠慮した。まもなく本葬があるだろう、そのときにはお別れに行こうと待っていた。

いつの間にか春が過ぎ、季節は夏へと移り、それにしても本葬は遅いと気づくようになりだした。そこへ、この原稿の依頼があって、もう、だいぶ前にお葬式は終わっていることを知らされ、また驚いた。もう夏も終わろうとしている日のことだった。お別れの式にはつらなることができなかつたかわりに、つたない一文を記すことにより、心の

お別れをすることにしよう。

今岡先生にはじめてお会いしたのは、いつであったろうか。また、どういう席であったのか。ふしぎなことに、さっぱり思い出されない。時々、嘲風会の会合に、ひょっこり姿をおみせになることがあったので、そんなときかもしれない。富山の学会のときだったか、『仏教から基督へ』の著書で名高い亀谷凌雲先輩が出席され、一同、感激したことがある。今岡先生が出席された嘲風会にも、似たようなざわめきがおこった。

たまたま、日本の宗教学史をつっついていたり、自由キリスト教の歩みにも関心を寄せていたので、いつとはなしに今岡先生は、気になる偉大な存在となった。

しかし、柳川先生より、今岡先生はめったに自分のことを語りたがらない方だから、お聞きするときはよく用意しておかなくてはならない、というような助言を与えられていたため、せっかく御健在でありながら、とくに時間をとっていただいとお話をお聞きできたのは1度だけだった。

さいわい、その折の記録は、拙著『明治宗教思潮の研究』に収めてある。校正の段階で先生はお

目をとおして下さり、1、2の点で訂正を下さったように覚えている。今からみれば大きな記念となったが、もっともとお聞きしたかったことが後から次々として出てきて残念でならない。

やがて、こちらからだけでなく、今岡先生からも、私に依頼のあることが生じるようになった。先生はなかなか筆まめで、そういうときにも、封筒に入れた、なかなか丁寧なお手紙を下さることがおおく、恐縮したものである。そのうち、比較的記憶のあざやかな2つの話を記そう。

最初の話は、今岡先生から、倉田百三の『出家とその弟子』を読みたいとお申し出をいただいたことである。倉田の『出家とその弟子』は、日本文で読もうと思えば、簡単に本を入手して読むことができる。だが、今岡先生は、その英文の出ていることを知り、その方で読みたいといわれるのである。

私は、このお申し出に接して、非常に心打られた。すでに百歳に近づいていられる先生が、そんなお年にもかかわらず、すすんで勉強されようとしていたからである。まことに「人生大学に卒業なし」である。

グレン・ショウによって訳出された英文『出家とその弟子(The Priest and his Disciples)』は、ロマン・ロランの激賞した作品である。ロマン・ロランが激賞したのは、そこに、百合の花と蓮の花とが、一体となっている精神をみたらという。今岡先生が、日本文でなく、わざわざ英文で読みたくなられたのは、おそらく、このロマン・ロランの体験をわかちたかったためと思われる。

ロマン・ロランが、百合の花でキリスト教と西洋、蓮の花で仏教と東洋を象徴していたことはいうまでもない。まさに今岡先生の一生の課題も、百合の花と蓮の花とを、ともに咲かせることにおかれていた。今岡先生の到達された宗教観は、両者を合せて1つの別の新種を作るというのではなく、両者を、それぞれともに咲かせることだった。世間では異なる見方もあるかもしれないが、私にはそんな気がしてならない。

折よく、私の手もとには、英文の『出家とその弟子』が重複してあったので、さっそくお届けすることができた。

次の話は、柳川先生を介してだったようだが、1893年にシカゴで開催された万国宗教大会の記録を求められているということだった。今岡先生は、東大の宗教研究室にあるはずと思っていられたのになかったらしい。

シカゴの万国宗教大会については、日本文でも何冊か短いものが出ているが、大会委員長J・H・パロースの編集による公式記録集は、なにしろ2冊からなるうえに、おのおの1,500ページを越すボリュームである。私が探していたころでも宗教学研究室にはなく、都内の主要な図書館でも見つからず、結局、成田の図書館で見ることができた。

“The World's Parliament of Religion”と題される2巻からなる大冊を、私は思いきって全文コピーをとった。その後何年かたってから、古書肆を通じて原書が手に入った。コピーは余っていたのである。それで、私は、これもさっそく御届けにうかがった。コピーは紙の厚さだけでも30センチを越し、重さは運ぶのが骨折なほどだった。でも、これだけのものを、改めてお読みになりたいという先生の御意欲に敬服して持参したため、それも気にならなかった。

お届けしたお宅で、なぜこれをお読みになろうとするのか、先生の口から語って下さった。先生は、なんとかして、もう1度、シカゴの万国宗教大会にあたる大会を、日本の地で開催することを切望していられたのである。

世界宗教平和会議の名をもつ大会は、日本でも開かれている。だが、先生は、それとも異なる、もっと大規模な、シカゴの万国宗教大会にまさるとも劣らない世界宗教大会を夢みていられた。それは、どうやら幾年も前より、先生の胸にあたためられ、ふくらんできた、いわば「見はてぬ夢」であったと思われる。

先生の、この「見果てぬ夢」をお聞きして、ふつうなら「もし私にも御手伝いできることがあるならば」と言いだすものだが、スケールがあまりにも大きなために、無責任なこともいえず、つい私は、一言も発しないままに戻ってきてしまった。

その後、しばらくして、今岡先生から、あのととき借用したパロースのものを返さなくてはいけない、とのことの書かれたお便りがあった。コピー

したものだから差しあげると申し上げたはずなので、あわてて、そういう心配の御無用なことを御返事した。そのとき、ふっと、私の申し上げたことを、先生が忘れていらっしゃることが気にかかった。

このやりとりがあってから、拝顔の機会は、先生の105歳の御祝いの会であった。あいにくこの年、私の方は持病を再発させ、腰が抜けて片足がマヒするという病臥生活を3、4か月送っていた。105歳の方の御祝いの会に出れないのは、いっそう情けなく、淋しかった。少し快方にも向いかけていたので、久しぶりに床を離れて思いきって出かけた。なんとか、これに耐えることができ、また先生にはげまされてしまった。

次の年、立教大学で宗教学会の大会を開かざるをえないことを、藤田先生から相談されたのは、その帰りのことだった。藤田先生も、私の体のこ

とを配慮されて、言い出しにくかった日々を送ってきたようだが、今岡先生にはげまされた直後なので、私もしかたがないというような返事をしてしまった。こうして、学会の最終日、ふたたび、少時間動けなくなるときまで、今岡先生は、私の再起を支えて下さった。人々が、いっせいに懇親会場に消え、人っ子一人もいなくなったうす暗い教室に、しばらく身を横たえていた私は、学会の話が実質的にきりだされた、この御祝いの日のことをしきりに思いだしていた。

御祝いの会そのものは、たいへん地味でつましい会であった印象が強い。「主にあるは、一日は千年のようであり、千年は一日のようである」(ペテロ後、3-8)の聖書の言葉を引かれ、ただ生きているだけが長生きではない、とほりのいい声で語られたのが、今も耳底に残って響きやまない。